

今福線の最近の展開

村上 英明

1、はじめに

今福線研究分科会が実際に始まったのは、2010年（平成22年）9月23日の打合せからなので、満7年以上、活動を続けてきたことになる。

昨年9月には広浜鉄道今福線シンポジウムが開催され、これが大きな転換点となり、最近は今福線の現地にも大きな展開がみられるようになった。

それだけではない。今福線研究分科会独自の活動からも新しい展開がいくつも生まれ始めた。

今回はこれらを総括的に報告することにしたい。

2、五新線との連携

2-1、視察旅行

五新線というのは、今福線と同じようにレールが敷かれることがなく未完成のまま鉄道敷が残されている、いわゆる未成線の一つである。

これは、奈良県五條市のJR五條駅と和歌山県新宮市を結ぶ鉄道路線計画であったが、ここも今福線と同じように国鉄の赤字により、工事は中断され未成線となったところである。

この地元でも、その遺構を地域起こしに利用しようと活動されていることを知り、我々の今福線研究分科会で視察に行くことにした。この時は、近くの大仏鉄道という古い廃線も合わせて視察した。

この視察旅行は、昨年（2015年）11月28日・29日に行なわれ、私は他の日程と重なり参加することができなかった。

視察の詳細は、参加することのできた他の会員から報告されると思うので、ここでは触れないが、この時、現地のご案内などで「NPO法人 五新線再生推進会議」や五條市の方々にお世話になり、我々今福線研究会との繋がりができた。

2-2、五新線からの今福線視察

今年（2016年）7月23日・24日、「NPO法人 五新線再生推進会議」や五條市の方々が、今福線を視察においでになり、浜田市や地元の方々と一緒に我々も現地案内や懇親会を行った。

視察当日は暑い日であった。下長屋トンネル北口へは全員が、冷房の効いた車から出て、



写真一、下長屋トンネルのミストの中



写真一 2、五新線の方々の今福線視察案内

炎天下を鉄道の道をあえぎながら歩くことになった。

ところが下長屋トンネルに着いてみると、坑口からは薄い霧のようなミストが湧き出ていた。その霧の中に入るとそれまでの暑さとは別世界の涼しさで、期せずして全員から歓声が上がリ、しばらく立ち去ることができなかった。

案内役を勤めた我々にとっても初めての体験であった。

写真にミストが写り込まなかったのが残念である。

3、講演

島根県浜田地区建設業協会から特別講演の依頼が来た。今福線について1時間半の講演をしてもらいたいとのことであった。私・村上に白羽の矢が当り講演をさせていただくことになった。

開催は浜田市原井町にある浜田建設会館で、3月3日であった。会場には100名ほどが参加されており、若い技術者も多かった。

今福線の現地の写真をたくさん映して話させていただいた。1時間半は長すぎると思ったが、みなさん熱心に聞いていただいた。

今福線の遺構は市内の県道脇に残っているので見たことはあっても、詳しいことはよく解らない人が多かったようで、興味深く聞いていただいたように感じられた。



写真一 3、建設業協会での講演

4、遺構の観光ルート化に伴う協力依頼としまね景観賞受賞

4-1、浜田市からの協力依頼

昨年9月には浜田市長から島根県技術士会あてに、今福線の鉄道遺構を観光ルート化したいので、助言と協力をいただきたいとの協力依頼が来た。あわせて中国都市美協議会において視察を行うので、その視察ガイドの依頼もあった。

視察には昨年10月29日、和田浩会員にガイドをしてもらった。

4-2、しまね景観賞の受賞

中国都市美協議会の視察と審査を経て、今年2月4日に今福線の遺構が島根県の第23回しまね景観賞の奨励賞を受賞した。詳しくは和田会員からの報告

に期待したい。

5、研究会の進め方打合せ

今福線研究は、浜田市、地元、五新線などいくつもの団体などとの繋がりができて、様々な展開をみせるようになってきたので、それらへの対応と調整もしなければならなかった。

また、我々研究会で毎年行っている現地踏査について、浜田市から今年は公募して一般者も同行できるようにしたらどうかとの意見も出されていたので、それらについての話題も多かった。

現地踏査では、今までに行ったことのないトンネルなどもあったし、公募した一般者を同行しては、我々の研究ができなくなるとの判断から、一般公募まではせず、浜田市と地元団体の方々と同行するに留めることにした。



写真—4、研究会の打合せ

6、現地踏査での初めての調査などと地元・浜田市の対応

6-1、初めての調査など

今年の現地踏査は、11月5日・6日に行った。5日の参加者は市役所、地元を含めて16名であった。



写真—5、11月5日の現地踏査

今回はハシゴ、箱尺、巻き尺などを準備して寸法を測定し、シュミットハンマーでコンクリート強度を測定したり、RCレーダーにより鉄筋の有無の調査も行った。

現地は先ごろまで草木が生い茂って、歩きにくかった旧線側が、地元の方々の手厚い整備により、草木はきれいに伐採されて、歩きやすく見通しもよくなっていた。

現地は先ごろまで草木が生い茂って、歩きにくかった旧線側が、地元の方々の手厚い整備により、草木はきれいに伐採されて、歩きやすく見通しもよくなっていた。



写真—6、寸法測定



写真—7、強度測定



写真—8、鉄筋有無調査

鎌で刈り払いながらかろうじて踏査したところと比べれば、うそのように快適で能率的な踏査となった。

遺構の寸法、コンクリート強度、鉄筋の有無などについては、他の会員から報告されると思うので、ここでは詳しくは述べないが、トンネルのコンクリートは非常に健全で施工時点よりも固化が進んでいるように思われ、鉄筋は現在の一般的施工と同様に入っていないようであった。



写真一 9、有福第3トンネル南口



写真一 10、11月6日の現地踏査

5日の晩には全員で懇親会を開いた。

明るく6日には、昨年まではうっそうと茂った木々に隠されて県道からは見ることもできず、川に遮られて近寄ることもできなかつた有福第3トンネルを、初めて踏査した。

川岸から急峻な斜面を登った上にそのトンネルはあった。周辺は雑木が生え放題で、近年人が立ち入ったような形跡はなく荒れていたが、我々として初めて見る現地には、特別な感慨があった。

6-2、地元と浜田市の対応

今福線を観光地として、外部の人々に見てもらいたいという地元や浜田市の意思は様々な形で実現してきた。各地で、遺構を隠していた木々が伐採され、雑木や草刈りがなされて、現場はきれいになっていた。

下長屋トンネル北口では、以前は旧線の先は見えなかったが、今回は初めて写真11のように見通すことができるようになっていた。

ここへの入口には新しいフェンスが新設されており、そのすぐ脇には真新しい木箱が立てられていた。「見学者記録簿と記念カード」が入っているという。

木箱の扉を開けてみると、中にはすでに来訪者の氏名と住所が記載されていた。



写真一 11、右手に旧線を見通す



写真一 1 2、防護柵と木箱



写真一 1 3、見学者記録簿箱の中

またここには写真 1 3 に見る記念カードが入れられており、持って行ってください無料ですとある。



写真一 1 4、大きな案内図

旧線と新線が初めて交わる付近(鉄道の始点)では、真新しい防護柵が設置されており、おろち鳴き橋の手前の広場には新しい大きな案内図も立てられていた。

しかもこの案内図は、我々の研究会が作成し印刷・配布した今福線マップのデザインとイメージが踏襲されており、ここでも我々の活動が生かされたと実感した。

そしてもっと驚いたのは今福線見学者のための駐車場と休憩所が新設され、トイレまで設置されていたことである。



写真一 1 5、駐車場とトイレと休憩所

今福線を見学しようとする、駐車場をどこにするか迷う人が多いと思われるが、この駐車場と休憩所はよくぞと思う。

トレイの扉を開けてみて驚いた。写真一 1 6 に見るように素晴らしくきれいなのである。聞いてみると、上下水道の通っていない土地なので、清潔さを考えてバイオトイレにされたとのことであった。

後は利用される人々に、きれいに使っていただけることを切に願うものである。

7、来年への展望

今福線に関しては、いくつもの活動が進行中であり、来年には形を現すものにも触れておかなければならない。

7-1、未成線サミット

先に述べた五新線では、今までにも未成線敷に1 kmの木のレールを敷いて、ミニ列車を走らせるなどのイベントを実施されたとのことであり、来年3月4日(土)・5日(日)には「全国未成線サミット」を開催されるとのことである。

全国には12の未成線があると聞いたが、そのすべての地元呼びかけて、第1回目のサミットを五條市で開催するというのである。

そのサミットに我々の出席を求められ、すでにこの研究会からの出席者を決めつつある。

さらに、このサミットの第2回目は、浜田市の今福線で開催してもらいたいと、強く要望された。現在では、未成線サミットの第2回目が浜田市で開催されるかどうかはわからないが、もし浜田市で開催されることになれば、今年のシンポジウム同様に島根県技術士会へ協力要請が強くなされることになりそうである。

7-2、郷土誌「郷土石見」への連載

石見地方唯一の郷土誌であり、各図書館にはほとんどバックナンバーが蔵書されている「郷土石見」という郷土誌がある。

これを刊行している石見郷土研究懇話会から、今福線についての連載を要請され、すでに幹事から第1回目の原稿を提出した。年明けの1月刊103号から連載が始まる予定である。

この1年の展開をざっと述べたが、すでに6ページにも渡ってしまった。今後も今福線研究会は、地元やいくつもの団体との連携により、様々な展開をして行くにちがいない。

島根県技術士会のお力添えと、今福線研究分科会の会員の仲間の健闘をお願いしたい。



写真—16、バイオトイレ

以上。